「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター　　執筆担当：斎藤登美夫

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

◇◆◇　No.0516　◇◆◇　　19/01/09

【　過去 2 年の 1 月相場は荒れ模様、今年も「経験則」を踏襲　】

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。皆様にとって、良い一年でありますように。

昨年は 1 年間を通して 10 円も動かなかったドル/円相場だったが、今年は年明け早々にアクティブな動きをたどっている。なんといっても、今年最初の 1 週間（18 年 12 月 31 日含む）で 5 円以上の値動き、昨年の年間変動の半分もすでに動いている計算だ。
そんな 1 月相場は、経験則からみても幾つかの意味で非常に興味深い。詳細は以下で記すが、今年一年の動静を見極めるうえでも重要であるため、引き続きその動きには注意を払いたいところだ。

◎「1 月に年間の天底」示現も少なくない、今年も要注意

まずは、1 月相場の戦績について、1990 年以降昨年まで過去 29 年間を振り返ってみると、勝率は 13 勝 16 敗となっており、それほど大きな偏りはみられず、明確な方向性もうかがえない。
エコノミストのあいだなどでは、年末にかけてのリパトリエーションの反動、「名実ともに新年入り、新しい四半期に入ることで機関投資家を中心とした新規外債投資が期待できる」――などといった声、つまり需給面からはドル高有利との指摘が聞かれていることも少なくないが、過去の経験則を参考にするなら、必ずしもそうとは言えないようだ。

そんな 1 月相場には、特徴が幾つもあるのだが、なかでも興味深いものとなると、以下の 3 つだろう。ひとつずつ順を追って説明を施したい。

最初に取り上げるのは、「月間を通した値動きが両極端である」ことで、動く年はかなり激しい価格変動を記録するものの、逆に動かない年はピタリとベタ凪状態が続くことが少なくない。ただ、ここ数年は前者の「激しい価格変動」をたどることが目に付く結果となっている。
実際、2015 年の 1 月は変動幅 4.89 円で年間 3 位の変動を記録していたほか、2017 年も変動幅 6.52 円で同 1 位、昨 2018 年は変動幅 5.10 円でやはり同 1 位となっていた。そして、今年はというと、ご承知のようにすでに 5 円程度の変動を記録しており、現段階ですでに 3 年連続の「激しい価格変動」をたどった、経験則通りだったと言ってよいだろう。

次に、一年 12 ヵ月を比べて見た場合、不思議なことにドル/円相場は「1 月に一年の天底をつける」ケースが非常に多い。
実際、1990 年以降昨年までの 29 年間で 11 回の「年間天底」を記録していた。確率にすると、およそ 4 割であり、実際に喫緊の事例だけを取り上げても、2015 年は 1 月に年間のドル最安値を示現しているほか、2016 年と 2017 年は逆に 1 月高値が結局年間を通したドル最高値となっていた。ドル高値 or ドル安値のいずれになるかは不明だが、今年も同様の事態発生について注意を要しそうだ。
なお、筆者の相場観とは異なるものの、最近の価格変動をみると、1 月 3 日に 104 円台まで急落した際のドル安値がヒョッとして、今年の年間ドル最安値であった可能性を否定できないかもしれない。

最後 3 つ目の特徴は、「1 月の月足陰陽と、年足陰陽が同じになる確率が高い」――ことになるだろう。つまり、1 月の月足が陽線であれば、その年一年間はドル高・円安に振れる公算が高く、実際に年足も陽線引けとなる公算が大きい。
ちなみに、こちらについても 1990 年以降昨年まで過去 29 年間の戦績を調べてみると 18 勝 11 敗、6 割強の的中率を誇っていた。たとえば、一昨年の 2017 年も昨年の 2018 年も 1 月は月足陰線で、年足も陰線引けだ。ともかく、飽くまで参考程度の要因として、頭の片隅に是非とも留めておいて損はない気がしている。（了）

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。
なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

◆◇◆　Copyright　(C)　fx-newsletter limited　company All Rights Reserved　◆◇◆